

日本保育者養成教育学会 ニューズレター ■第1号■

The Japanese Society for the Study on Hoikusha Education

2018年9月3日発行 編集・発行 日本保育者養成教育学会

170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1-4F(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内

ニューズレター「巻頭言」

日本保育者養成教育学会 会長 小川清美（大妻女子大学）

平成28年（2016年）3月に発足した本学会も3年目を迎えました。平成29年（2017年）3月には、第1回研究大会を白百合女子大学で開催し、平成30年（2018年）3月に、第2回研究大会を共立女子大学で開催、来年3月には、第3回研究大会が東北福祉大学仙台駅東口キャンパスで開催されます。

毎年、開催される研究大会と、毎年発行される学会誌『保育者養成教育研究』を着実に実行することで、この学会が、学術団体として認められる日も遠くないと思います。

学会事務局は、準備委員会として、手弁当（ボランティア）で行ってまいりましたが、2017年には、会員による理事選挙が実施され、理事による会長選挙が実施されました。また、事務局をガリレオという業者に委託して、様々な業務はガリレオが担い、理事・監事は学会運営に必要な活動をすることができるようになりました。

「ニューズレター」はその一つです。ホームページを通して、皆様にお伝えしたいことを発信していきたいと考えています。本学会のホームページをごらんになって、すでにお気づきのことと思いますが、本学会と保育教諭養成課程研究会が共同で今回の保育士養成課程改定に係るシラバスと幼稚園教諭養成課程のそれとの整合性を考える機会を持つことができました（「幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について」）。単に二つの学会の作業ということではなく、二つの学会が厚生労働省と文部科学省を繋ぐ機会となった意味のある作業だったと思います。保育士養成であれ、幼稚園教諭養成であれ、学ぶ学生にとって、養成課程で大事なことは共通のはずです。日本ではまだ行政が縦割りで別々ですが、対象にしている子どもたちは同じです。養成校で学ぶ学生を指導する教職員にとって、示されたシラバスを具体的にどのように展開するのかということだけではなく、それぞれ

の専門性を高める努力をしておかなければなりません。また、幼稚園、保育所、認定こども園、施設などの保育現場で実践している職員も自らの実践を振り返り、考察する機会が必要です。

始まったばかりの「保育者養成教育学」のために皆で協働していきたいと思いません。

保育士養成課程の改定に携わって

日本保育者養成教育学会 会長 小川清美（大妻女子大学）

これまで、一度も保育所保育指針の改定に携わってこなかった私に、厚生労働省から保育士養成課程等検討会の委員への依頼があり、他の会議のために遅刻していった私に副座長という役割が与えられた（前もっての打診はなかった）。

検討会は保育士養成に関係する方々だけではないので、実際の保育士養成課程（シラバス）を構築していく作業は、下部組織としてのワーキング委員会が作られた。ワーキングには大学や短大などの養成校で保育士養成をしている新たなメンバーが加わり、私は、この委員会のまとめ役を仰せつかった。ワーキングのメンバーの専門は多岐に亘ってはいたが、福祉を専門としている人がいなかったのも、厚生労働省の中の関連する専門官が必要な時に参加した。

言うまでもなく、保育士養成課程は、「保育所保育指針」の改定に合わせて行われる。約10年に一度、社会の変化に応じて指針が改定される。2年間で養成するのが基本であり（これは変えられない）、現行の68単位を増やすことは絶対にできない。指針の改定に合わせて、課程は変えなくてはならない。

単位を増やすことができれば、比較的容易だが、増やさないとところからの出発である。内容を減らすことなく、単位だけを減らすためには、シラバスの内容の組み換えを見直すことをせざるを得なかった。至難の業であった。

「保育士」という資格は0歳から18歳までの「子ども」を対象とする広い専門性が求められる。現在の制度のままでいいのだろうか、今後、考えていかなければならないと思う。

また、これまでの改定では、厚生労働省の各地方の厚生局が、具体的に説明する機会があり、丁寧な question and answer があった。各地方で少しの違いはあったものの、厚生局がしっかりと責任を負っていたと思う。ところが、今回の改定で養成校がもっとも危惧したのは、改定したシラバスをチェックするのが都道府県の担当者であることであった。都道府県の担当者が保育士養成に関して、どのくらいの専門的知識を持っているのか、まったくわからなかったのである。幼稚園教諭養成課程の方は、再課程が文部科学省で行われ、文部科学省の担当者が是か非かを決定する。重なっている科目が多いのに、保育士養成課程のチェックは都道府県の担当者でいいのだろうか？保育教諭養成課程研究会と共同でシラバスを作成したが、厚生労働者は都道府県の担当者にそのシラバスを提示して説明されている。都道府県の担当者は、おそらく、そのシラバスを基本として見ていくと思われる。

今回の保育士養成課程で必要なのは、各養成校で担当者たちが皆でどのような保育者を育てたいのかを話し合い、情報共有することである。

日本保育者養成教育学会 第2回研究大会報告

第2回研究大会 実行委員長 小原敏郎（共立女子大学）

2018年3月4日（日）、共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス3号館において第2回研究大会が行われました。学会企画シンポジウムとして、「これからの保育者養成—養成課程の改定／改訂を控えて—」が行われ、話題提供者の阿部和子先生、入江礼子先生、神長美津子先生から、指針、要領の改定・改訂や保育者養成の核心に迫るお話を聞くことができ、今後の保育者養成教育の進むべき道を考えることができました。

参加者は会員395名、非会員100名であり、大変多くの方が参加してくださいました。また、発表は口頭発表が52件、ポスター発表が144件であり、第1回大会より50件ほど多くの発表がなされました。会場では養成校教員や保育者から保育者養成教育に関する実践的な研究発表がなされ、活発な意見交換が行われました。保育者養成教育学の確立への道のりはまだ緒に就いたばかりかもしれませんが、この大会がその確立、発展に少しでも貢献できたのではないかと嬉しく思っています。

狭い会場や階段の昇り降りにご苦勞をおかけしましたが、特に大きな混乱なく無事に終了しましたことは、参加者各位の暖かいご理解とご協力の賜と厚くお礼申し上げます。なんとか東北福祉大学で行われる第3回大会にバトンをつなぐことができ今は安心してあります。最後に大会を支えていただいた共立女子大学のスタッフに心から感謝申し上げます。

日本保育者養成教育学会 第3回研究大会 開催に向けて

第3回研究大会 実行委員長 和田明人（東北福祉大学）

日本保育者養成教育学会第3回研究大会は、2019年3月2日（土）に宮城県仙台市の東北福祉大学仙台駅東口キャンパスで開催いたします。

2019年4月からの新・養成課程適用の目前の時期ながら、今般の第3回研究大会におきましては、大会テーマを「保育者養成教育学の構築に向けて」と掲げました。

シンポジウムでは、保育学ならびに保育者養成教育の歴史的変遷をもふまえつつ、理論・実践はもとより多様性にも富んだ複眼的視点から福祉・教育等の視座を重ね合わせながら、あらためて『保育の不易』にも焦点をあてていただくことで、保育者養成教育学の構築に向けた活発な論議をいただけることと存じます。

また、口頭発表・ポスター発表等の各プログラムでは、保育者養成教育のあるべき姿を探求し続けておられる参加者相互で自由な討議が行われ、充実した研究発表の場となるよう、実行委員会一同で運営の任にあたって参ります。

今般の大会会場の【東北福祉大学仙台駅東口キャンパス】は、にぎわい創出を期待して新たに整備されたJR仙台駅東口から徒歩2～3分程度の至近距離にあるため、遠方よりお越しのお忙しい方々にも、“楽都仙台”の様々なお楽しみや“みちのく”の観光をご所望の方々にも、とても便利な場所かと存じます。

夕刻からの情報交換会では、諸種の仙台名物をご堪能いただきながら、ご交流を深めていただければと願い、心を込めて諸準備を進めて参る所存です。

早春の仙台にて、たくさんの皆様のご参会を心からお待ちいたします。

学会の現況について

日本保育者養成教育学会 副会長 高橋貴志（白百合女子大学）

日本保育者養成教育学会が2016年3月に発足し、約1年半が経過しました。その間、会員数は増加の一途をたどり、現在約900名となっています。ただ、会員の多くが研究者であり、本学会の基本姿勢である、保育者養成に携わる研究者と現場の保育者の協働体制の下でこれからの保育者養成教育について探究していく、という点においてはまだまだ不完全な部分があるのも事実です。

しかし、光も見えます。先日、ある自治体の園長会（保育所）で、改定保育所保育指針に関する勉強会をしていたとき、何気なく、本学会の存在と学会が目指す方向性についてお話したところ、園長先生たちの中で、本学会に興味を示された方は少なくありませんでした。もちろん、日ごろの保育をしながら学会にかかわる時間を作ることは難しい、現場保育者が学会にかかわることのイメージがもちにくい、研究者との協働とは具体的にはどのようなことかわかりにくい、などのご意見もいただきました。ごもっともだと思います。学会として一つ一つ、丁寧に回答していく必要性を感じます。

また、今年の3月に共立女子大学行われた第2回研究大会に、ゼミの学生を引率して参加された養成校の先生がいらっしゃいました。将来の保育者をめざす学生が保育者養成教育に関する研究に触れる機会を持つことが、本学会が目指す研究者と保育者の協働体制の確立に大きく貢献することは想像に難くありません。

微速ではあっても、一步一步確実に前進している保育者養成教育学会を、今後ともどうぞよろしく願いいたします。